

密教の理想郷

— シャンバラ伝説とは何か? —

松本峰哲

一 はじめに

理想郷とは、『広辞苑』によると「想像上の、理想的で完全な社会⁽¹⁾」と説明されている。一切衆生にとって「理想的で完全な社会」の実現は、まさに究極の理想であり、したがって古代から、世界中には様々な理想郷伝説が伝えられているが、その中の一つにシャンバラ伝説がある。これはインド密教における理想郷伝説であり、またこの伝説は、あまり知られていないインド密教の終末論とも深く関わっている。『世界宗教辞典』によると、次のように説明されている。

「チベットの奥地に存在しているといわれる仏教徒のユートピア、シャンバラをめぐる伝説。後七世紀ころから仏教文献にその名が現れるようになり、シャンバラを聖なる蓮に見立てた曼荼羅も、制作されている。チベット仏教のもつとも高遠な教えとされる『カーラチャクラタントラ』（『時の輪の教義』の意）

を信仰するこの聖都には、精霊の軍団を率いる帝王がいて、やがて起こる最終戦争に勝利して世界に永遠の黄金時代を招来するという。(以下略)⁽²⁾」

先行研究においてシャンバラ伝説は、本来ヒンドゥー教に伝わっていたものを、後期インド密教の経典である『カーラチャクラ・タントラ』(Kālacakra-tantra: 以下KT)が取り入れて、仏教の伝説に作り替えたものであると指摘されている。本稿では、ヒンドゥー教経典、仏教経典等に見られるシャンバラに関する記述内容を考察することによって、密教の理想郷伝説の形成過程を考察してみたい。

二 ヒンドゥー教とシャンバラ

前述の通り、シャンバラ伝説の起源はヒンドゥー教にあるとされている。そこでまず、シャンバラ伝説の初出と考えられる『マハーバータ』(Mahābhārata: 以下MBh)の記述を見てみたい。MBhは、BC4-AD4に成立したとされる古代インドの巨大な叙事詩であり、「ここに書かれていないものは、ほかにもない⁽³⁾」と経典自身が謳っている。次に挙げたのは梵仙マールカンデーヤが世界の終わりについて語る場面である。⁽⁴⁾

MBh 3・186・29~30

「多くの邪悪な蛮族の王 (mleccharāja) 達が悪政により地上を統治し、虚言にふけるであろう。アーンドラ族、シャカ (Śaka) 族、プリンダ族、ヤヴァナ族、カーンボージャ族、アウルニカ族、シユードラの王、アービーラなどの蛮族の王が……」

「私（||マールカンデーヤ）は三界をまたぐ者であり、一切の本性であり、全世界に幸福をもたらす者であり、最上者であり、遍在者であり、無限であり、髪の逆立った者であり、大股で闊歩する者である。私のみが時輪を転じる（*Kalacakram nayami*）、私は形なきものである。一切万物を鎮静するものであり、全世界の利益に努力する。」

MBh 3・188・89〜93

「カルキ・ヴィシユヌヤシヤス（*Kalki Visnuyasas*）という、強力で知性と勇猛さに満ちたバラモンが、時間にかりたてられて（*kalapracodita*）出現するであろう。彼はシャンバラ村（*Sambhala-grāma*）で清らかなバラモンの家に生まれる。彼が心で考えると、すべての乗り物、武器、戦士、刀剣、鎧が彼の前に現われる。彼は法により勝利し、王となり、転輪王となるであろう。彼はこの混乱した世界を平安にするであろう。このそびえ立ち燃え上がる高邁な知性のバラモンは、帰滅を終わらせる。彼は一切の破壊「者」であり、ユガを回転させる者である。そのバラモンはバラモンたちに取り囲まれ、いたるところで一切の蛮族の群れ（*mlecchagana*）を滅ぼすであろう。」

ここに既に、シャンバラと仏教及びKTの関係を予想させる記述を見ることができ。シャカ族が蛮族の一つにされていること、カルキがバラモンにされていること、そしてシャンバラが国ではなく村の名前であるところが興味深い。ちなみにカルキとは、シャンバラ伝説に於てはシャンバラの王のことであり、KTに於けるシャン

バラ伝説の重要なキーワードとなる。

つぎに十世紀ごろ成立したとされる、ヒンドゥー教ヴィシュヌ派で重要視される経典『バーガヴァタ・プラーナ』(Bhāgavata-purāna: 以下BhāP)におけるシャンバラに関する記述を挙げる。

BhāP 12・2・16-21

「カリ・ユガの終わり頃、人々が悪しき道德を守る時、ヴィシュヌは正法を救うためにカルキの姿をとって出現する。カルキはシャンバラ村(Sambhala-grāma)のヴィシュヌヤシヤス(Visṇuyāsas)というバラモンの家に生まれる。彼は神々から授かった駿馬に乗り、剣をもって邪悪な連中を成敗する。そして彼は馬で全世界を駆けめぐり、王の姿をとった悪党(dasyu)どもをみな殺しにする。すべての悪党が殺された時、人々の心は再び清らかになり、それからクリタ・ユガが再び始まるのである。」

基本的なカルキ及びシャンバラに関する記述はMBhとほぼ共通しているが、異なるのは、カルキ・ヴィシュヌヤシヤスがヴィシュヌの化身とされる点である。

続いて同じくヒンドゥー経典の一つである『アグニ・プラーナ』(Agni-purāna: 以下AP)の記述を挙げる。

AP 16.2-4

「悪魔に悩まされた神々を救うために、ヴィシュヌはシュッドローダナ(Suddhodana)の息子として生まれた。彼は悪魔たちを迷わせて、ヴェーダ(Veda)の宗教を捨てさせた。彼らは仏教徒(bauddha)

となり、彼らに導かれて他の者たちもヴェーダを捨てた。彼は阿羅漢 (arahata) となり、続いて他の者たちも阿羅漢にした。かくて彼らはヴェーダの宗教を捨てて異端 (pasandin) となった。彼らは最低の人からも布施を受け、地獄 (naraka) に墮ちるにふさわしい行為を行った。カリ・ユガの最後に、彼らはすべて混合カースト (saikara) となるであろう。」

ここではヴィシュヌがシュツドーダナ (浄飯王) の息子、即ち釈尊の姿をとることが説かれている。ヴィシュヌ神には、世界を救済する為に十の姿をとって我々の世界に現われるという十化身の信仰があるが、そのうち第九番目が仏陀、十番目がカルキとされている。従ってここに挙げた BhāP と AP の記述は、共にこの信仰が元になっていると考えられるが、ここでヴィシュヌの化身という関係を仲立ちとして、カルキと仏陀に関係が生まれている。また AP は、仏陀によってヴェーダの宗教が廃れ、カースト制度が崩れてしまうことを非難している。

三 密教とシャンバラ

三—一 KTとシャンバラ

以上、ヒンドゥー経典におけるシャンバラに関する記述を見てきたが、次にインド密教において最も遅れて成立した経典である KT の記述を見てみたい。次に挙げたのは、KT の注釈書『ヴィマラプラーバ』 (Vimalaprabhā: 以下 VP) において、KT の成立について説かれている部分である。

「金剛手の化身であるスチャンドラ (Succandra) 王が、一切衆生の世間出世間の悉地成就の目的で

「釈尊が『最勝本初仏タントラ』をスチャンドラ王に説いてくれることを」請問したのであり、教主たる釈尊は、シーター (Sita) 河の北辺にあるシャンバラ国等の九十六億の村に住する者たちの心が近い将来、清浄となることをご覧になり、難解な金剛語を明らかにする一万二千頌の『本初仏』⁽⁵⁾ (『最勝本初仏タントラ』) をお説きになったのであり、未来において三千五百万の梵仙達と、九十六億の村に住する者たちを教化する為に一万二千頌の『本初仏』の要抄タントラ (『KT』) を作ることに、そのタントラを説くこと、そして金剛族の灌頂によってすべての部族を一部族になすことを文殊の化身であるカルキ・ヤシヤ (Yasa) に授記されたのであり、また第二代カルキである私プンダリーカ (Pundarika) に「KTの」注釈 (=VP) を作ることを授記されたのである。⁽⁶⁾」

内容を少し補足しながら整理すると、釈尊が涅槃される二年前、南インドのダーニヤカタカ (現在のアマラーヴァティ) の仏塔において、そこに聴聞に訪れたシャンバラの王スチャンドラの求めに応じて、将来すべての人々が差別カーストを離れた一つの密教徒になる為の教えを釈尊が説いた。それが一万二千偈頌からなる『最勝本初仏タントラ』であり、この教えをスチャンドラがシャンバラに持ち帰り、この教えを広める為にヤシヤ王が作った簡略版『最勝本初仏タントラ』が『KT』である。そしてこの『KT』の注釈書が、ヤシヤ王の次の王であるプンダリーカ王の作ったVPである。つまりKTとVPは共にシャンバラにおいて作られた經典なのである。前掲のヒンドゥー經典の内容と比べると、村であったシャンバラがここでは巨大な国とされ、カルキ・ビシュヌヤシヤスが文殊菩薩の化身カルキ・ヤシヤとなっていることがわかる。また釈尊による仏塔での説法は、南天鉄塔伝説を連想させ、非常に興味深い。またカルキについて、VPは次のように説明している。

一瓶と秘密と般若智の灌頂により、一切の種族が一つのkalkaとなる。このkalkaを持つのがkalkinであり、その種族はkalki族である。」⁽⁷⁾

前掲のAPにおける、ヴィシュヌの化身仏陀によって、カースト制度が崩れてしまうという記述を、カルキという言葉を再解釈することによって、仏教によるカースト制度廃止による平等の実現という内容にすり替えているのである。このことによってヒンドゥー教に説かれていたシャンバラは、仏の化身である王が治める、カースト制度の無い平等な仏教国となったのである。

三―二 シャンバラの宗教と最終戦争

シャンバラの宗教について、前掲のVPの記述の中に「三千五百万の梵仙達と……」とあることから、元々は全ての人々が仏教徒ではなく、ヒンドゥー教徒達も居たことが解る。このことについて、VPは次のようなエピソードを紹介している。

「シャンバラの首都カラパ (Kalapa) にあるカラチャクラ立体曼荼羅の宮殿に、シャンバラ王であるヤシャ王は国中の梵仙 (brahma-ṛṣi) 達を集め次のように言った。「汝らの信じるヴェーダの法 (Veda-smti) に説かれる祭式において生贄として家畜を殺すことは回教の法に通じる為、このままでは今から八〇〇年後に子孫達はすべて回教徒になってしまう。これを防ぐ為に汝らは金剛族 (Vajra-gotra) の灌頂を受け、金剛乘 (Vajra-yāna) の徒となれ。もしそれが受け入れられないならシャンバラの国外に出てい

け。」と。

それに対して梵仙達の首であるスールヤ・ラタ (Sūrya-ratha) は、ヤシヤに対して次のように言った。「我々はヴェーダの法を捨てて金剛族の灌頂を受けることはできない。汝の言う通り我々はシャンバラを出てシーター河と雪山 (himavat) の南方にして、ランカー島 (Lankādīpa) との間にあるインド (Āryavīśaya) に行こう。」⁽⁸⁾ と言い、シャンバラを出ていった。

こうして梵仙達はシャンバラから出ていったが、そのことに対してシャンバラの王族のなかには遺憾に思う者たちもいた。そのことを知ったヤシヤ王は、神通力によって梵仙達がインドの林中に住しているのを知り、禪定に入り、加持力によって梵天達を気絶させ、一瞬のうちにシャンバラ国の曼荼羅の宮殿の中へと連れ戻した。目を覚ました梵仙達は自分たちは、ヤシヤ王の力に驚き、スールヤ・ラタが一同を代表して、自分たちに金剛族の灌頂を授けてくれるようにヤシヤ王に請問した。⁽⁸⁾

この記述から、シャンバラにはヒンドゥー教徒達が居たことが改めて確認できると共に、ヒンドゥー教徒達が、将来イスラム教徒化することを恐れていることから、*KT* が唱える最終戦争における敵が、イスラム教であることが解る。

KT の記述から最終戦争について要約すると、最終戦争はAD二十四世紀頃、第二十五代カルキ・ラウドラチャクリン (Raudra-cakrin) 王がシャンバラ国からシーター河の南に出陣することによって始まる。そしてこの戦いによってイスラム教徒は根絶され、ラウドラチャクリンはシャンバラに帰ってゆく。その後、ラウドラチャクリンの二人の息子がシーター河の南北をそれぞれ治め、仏教を広めてゆく⁽⁹⁾と説かれている。

このように最終戦争のテーマにおいても、KT及びVPが、ヒンドゥー經典に説かれる終末觀を、対イスラム教の独自の終末觀に置き換えているのが解る。

STはインド密教において最も遅れて成立した經典であることから、この經典に説かれているシャンバラのイメージを、インド密教におけるシャンバラ伝説の完成型と見ることが出来る。ところが、最終戦争の記述など、ここまで考察してきた限りでは、STに説かれるシャンバラからユートピアという平和なイメージを見いだすことはできない。では現代のユートピア的イメージはいつでき上がったのであろうか。

四 シャンバラ伝説の展開

四―一 チベット仏教經典に説かれるシャンバラ

KTによって一先ず完成されたインド密教におけるシャンバラ伝説は、十三世紀始めのインド密教の滅亡後、經典と共にチベットに伝えられてゆく。STがチベットに伝わる過程は、シャンバラ国からインドを経由してチベットに伝わる過程として十五世紀終りころに編纂されたチベットの歴史書に神話的に記されているが、⁽¹⁰⁾ シャンバラ国自体に関する記述はほとんど見ることが出来ない。

四―二 シャンバラの姿

ところが、さらに時代が下がって十八世紀頃になると、チベット仏教經典の中に、シャンバラについて詳細に述べたものが編纂されるようになる。これらの記述をまとめてみると、以下のようである。⁽¹¹⁾

・シアンバラ国の地形

「シアンバラはシータ河の北方にあり、巨大な八葉蓮華の形をしていて、周りを雪山で囲まれている。花びらはそれぞれ川と雪山によって形作られていて、国全体が美しい湖、草原、森で覆われている。八葉蓮華の花心にあたる部分が少し高くなっていて、そこにシアンバラの首都カラーパがある。カラーパの中央には王の住む宮殿がある。宮殿は様々な貴石で作られていて、常に光り輝いている。宮殿の中央には様々な宝石で飾られた玉座があり、玉座の真上は天窓になっていて、正面も透明なガラス張りになっている。天窓からは天体の動きや、世界中の神々をあたかも面前にあるように見ることが出来る。カラーパの北には木に覆われたごつごつした水晶のような峰々がある。そこには十の仏たちの巨大な姿がある。

カラーパの南にはビヤクダンの木立がある。木立の東には小さな湖があり、西にも同じ大きさの湖がある。湖では人や神々やナーガ達が、宝石でできたボートに乗って楽しんでる。それら二つの湖の間にあるビヤクダンの木立の中には、スチャンドラ王によって建立されたカーラチャクラの立体マンダラがある。」

・シアンバラの人々と暮らし

「シアンバラに生まれた人々は美しい容姿を持ち、皆とても裕福である。

シアンバラの男性は帽子をかぶり、白または赤の木綿の衣を着ている。女性は白または青のひだが付き、美しい模様の入った衣服を着ている。

シアンバラの人々はとても穏やかな法にしたがって生活しており、むち打ちや投獄といったことはこの国では知られていない。また病氣・飢えなどは存在しない。シアンバラの人々は一生のうちに、無上瑜伽タン

トラの教えによって仏性を獲得する。瞑想を練習しない召使いでさえ、シャンバラから他の国に生まれることはない。」

・シャンバラの僧

「シャンバラでは、僧侶は計り知れないほど敬虔に崇拜されている。僧侶の多くはナーガなどの召使いを与えられている。僧侶は財産を所有せず、頭を剃り、素足で、法衣と托鉢の鉢と杖だけを所有している。僧侶はVinayaの教えをきちんと守っている。」

これらの記述には、まさにユートピア的なシャンバラの姿を見ることができるといえる。つまり現代のシャンバラ伝説のイメージは、チベット仏教において完成されたと考えられる。特に「シャンバラの僧」に関する記述は、非常にチベット仏教的である。何故ならば、KTにシャンバラの僧に関する記述を筆者は見つけることができていないが、後期インド密教の経典であるKTには、瑜伽行者としての密教僧が説かれることがあっても、戒律を厳守する比丘僧が説かれることは考えにくいからである。それに対し、密教僧であつても戒律を厳守することが必須とされるチベット仏教の僧と、ここに説明されるシャンバラの僧のイメージは一致するのである。

五 おわりに

シャンバラ伝説に関して、BC4-AD4頃に成立したMBhから、十七世紀頃のチベット仏教経典まで、シャンバラに関する記述について考察を行った。再度整理すると、まず初出と考えられるMBhの記述を基本に、ヒンド

ウー教の様々な経典において発展したシャンバラ伝説を、先行研究の指摘通りインド密教最後の経典であるKTが仏教的解釈によってMT独自の伝説に作り変えた。特に終末におけるカーストの混乱に関する記述を、MT及び注釈書VPが再解釈し、シャンバラ伝説をうまくインド密教の終末論と関係づけることによって、インド密教におけるシャンバラ伝説を完成させたのである。そしてインドにおいて密教が滅亡し、チベットに密教が伝わるのと共に、シャンバラ伝説も共に伝えられ、チベット仏教においてシャンバラ伝説にユートピア的脚色が加えられ、密教のユートピアとしてのシャンバラ伝説の原形が完成したのである。因に、MTの記述通りに、実際にイスラムの侵入によってインドから密教が姿を消してしまったことが、シャンバラの神秘性を増大させ、チベットにおけるシャンバラ伝説の展開に拍車をかけたのであろうことは、想像に難しくない。

〔使用基本テキスト〕

1985.

AP : [Agni-prāṇa]

Mbh : [Mahābhārata]

Agnimahāpurāṇam, Sanskrit Text, English Translation and Index of Verses, English Translation according to M.N.Dutt, Edited and Revised by Joshi K.L.Shastri, Delhi, 2001.

The Mahābhārata, edited by Vishnu S.Sukhtankar and S.K.Belvalkar, Electronic text (C) Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune, 1999.

BhāP : [Bhāgavata-purāṇa]

VP : [Vimalaprabhā]

Bhāgavata Purāṇa of Kṛṣṇa Dvaipayana Vyāsa With Sanskrit Commentary Bhāvārthabodhinī of Śrīdhara Svāmin, edited by J.L.Shastri, Delhi, 1999.

Śrī Laghukālacakratantarāja ūkā Vimalaprabhā [Vol.I], edited by Jagannatha Upadhyaya,sarnath, 1986.

KT : [Kālacakra-tantra]

【書名】 : [Deb ther sngon po.]

A Critical Edition of Śrī Kālacakratantra-rāja (Collated with the Tibetan version), edited by Biswanath Banerjee, Calcutta,

The Blue Annals, english trans. by G.N.Roerich, Delhi 1979

〔参考文献〕

『世界宗教辞典』平凡社1991.

上村勝彦『インド神話』東京書籍1981.

上村勝彦『原典訳マハーバーラタ4』ちくま学芸文庫2002.

田中公明『超密教時輪タントラ』東方出版1994.

中村元『中村元選集（決定版）ヒンドゥー教と叙事詩』春秋社1996.

羽田野伯猷『インド・チベット学集成／第3巻インド編』法蔵館1987.

John Newman: "Brief history of the kalachakra", *Weel of time The Kalachakra in context*, New York, 1991.

注

(1) 『広辞苑』第五版 岩波書店1998

(2) 『世界宗教辞典』 pp.585-589

(3) MBh 1.56.33 "yad ihāsti tad anyatra yan nehāsti na tat kva cit"

(4) 本章における AP, BhāP, MBh の翻訳については、「上村 1981, 2002」を参照した。

(5) Skt: Ādibuddha, KT 及び VP では、密教における五仏を統括する第六仏としての本初仏を指す場合と、根本タントラである「最勝本初仏タントラ」を指す場合があるが、本引用箇所での本初仏は経典名である。

(6) VP p.24, ll.10-17

(7) VP p.22, ll.7-9

(8) VP pp.27 ll.5-pp.29 ll.20に該当する内容を要約した。

(9) 最終戦争に関してKTは、「異教徒の根絶と仏教の確立等の章」(150-170偈)において説いている。ところが注釈書VPは、「分かりやすい (subodha) から説明しない」として全く注釈を加えていない。VPがこれだけまとめて注釈を行っていないのはここだけであり、従来、これはVPの作者が戦争というテーマを仏教経典の内容として相応しくない為、あえて注釈しなかったのではないかと指摘されてきた。しかし同じKTの、「音声の発生と機械の規定を説く章」(95-149偈)において、最終戦争を念頭に置いていると思われる武器が説かれ、それをVPが寸法・材質・使用法など非常に細かく注釈していることから、注釈をしなかった理由が戦争というトピックだけだとは考えにくい。なお、このKTに説かれる武器については、拙稿『Kalacakra-tantra に説かれる最終戦争の武器』『密教学研究』38号 2006. を参照されたい。

(10) 十五世紀終わり頃に、チベット人ゲー・シヨンヌペーによって記された仏教史『青史』に興味深い記述がある。『青史』にはKTのインドへの伝播の歴史として、二つの系譜があることを紹介しているが、この二つの系譜には、非常に興味深い共通点を見ることが出来る。それは、どちらの系譜においても、最初にKTの教えを求めて、シャンバラを目指す者があるのだが、彼らは共に求法の途中で菩薩、

(11)

あるいはシャンバラの王の化身に会い、彼らからシャンバラに向かうことは非常に困難であるからとの理由で、その場で教えを授けられているのである。つまりこれらの伝承では、だれもシャンバラに直接行った者はいないのである。シャンバラの姿に関しては、[Newman 1991]を参照した。